

〔実践報告〕

子育て・子育て支援における大学・地域連携推進に関する実践的研究 「第1回ノトス子ども広場」の成果と展望について

得永 幸子* 藤枝 好**

— 目 次 —

1. 研究目的
2. 「第1回ノトス子ども広場」内容
3. 地域連携効果についての考察
4. 教育的効果についての考察
5. 課題と展望

キーワード：子育て・子育て支援、大学・地域連携、保育技術

1. 研究目的

さまざまな事故、致死傷事件の増加等子どもをとりまく社会的環境が急速に劣化する一方、一人っ子の増加、虐待等子どもをとりまく家庭環境も必ずしも豊かになっているとは言えない現状にあって、子育て・子育て支援に関する大学・地域連携を求める社会的要請は、今後ますます高まることが予想される。このことを受けて、四国学院大学子ども福祉学科では、子育て・子育てを総合的に支援できる子ども福祉のプロフェッショナルを育てることに学科の教育目標を置いてきた。

今回、大学・地域連携を具体的に推し進め、学生に実践的学習の場を保障する

* Sachiko TOKUNAGA 本学社会福祉学部教授（子ども福祉学科）

** Yoshimi FUJIEDA 本学社会福祉学部教授（子ども福祉学科）

試みとして、「ノトス子ども広場」（以下「広場」）を開催した。これは具体的には3つの授業の合同期末課題として学生に課したものである。「広場」の長期的目的としては、第1に、大学施設を地域の子どもと保護者に開放し、地域における子育て・子育て支援の拠点としての機能を充実させていくこと。第2に、実践的交流を通して、地域の保育所・幼稚園、また子どもと保護者のニーズを真に地域に密着しつつ、即時的にくみ取る機動力を学科、教員、学生が獲得して行くこと。第3に、授業で習得した保育技術を、子どもや保護者と共に実践する機会を学生に出来るだけ多く提供し、そのことを通して保育技術の向上を図ると共に、保育技術習得及び向上への動機付けを行うこと。第4に、地域の人々と親しく触れ合う中から、地域に根ざした保育実践を学ぶ機会を得ることで、将来保育士となったとき、その職場で地域の人々と連携する力を学生に蓄えさせること、以上4点を設定した。

上記のような長期的目的の上に立って、第1回の「広場」（以下「第1回広場」）を開催したが、「第1回広場」の短期的目標としては、近隣の保育所・幼稚園児とその保護者を招待し、土曜保育プログラムを提供すること、その中から地域の子ども・保護者のニーズを把握すること、学生が授業で習得した技術を応用発展させつつ、子どもたちと触れ合うことに置いた。

2. 「第1回ノトス子ども広場」内容

(1) 実施日時 2007. 7. 14 (土) 9:30~12:00

(2) 準備期間 2007年度前期授業

(3) 活動主体

主催 四国学院大学子ども福祉学科

該当科目

プラクティカムⅠ（1年生対象、あそび、おもちゃに関する実技習得を目的とする科目）：「第1回広場」では「あそびひろば」「たんけんひろば」「おもちゃのひろば」を担当。

プラクティカムⅡ（2、3年生対象、絵本読み聞かせ技法習得を目的とする科目）：「第1回広場」では「おはなしひろば」を担当。

子どもとことば：「第1回広場」ではプラクティカムⅠの担当をこなしつつ、参加者の親子間の会話を観察記録。

(4) プログラム（資料1）

(1) あそびひろば（和風製作）（資料2-1）

あらかじめ林保雄氏（「日本の凧の会」讃岐桃陵支部長）の指導により、伝統和風製作技術を習得。当日は、学生自身が来場した親子の指導にあたった。子ども自身が絵を描き、親子で製作を楽しんだ。台風接近のため、予定されていた凧揚げは残念ながら中止された。

(2) たんけんひろば（巨大迷路）（資料2-2）

段ボール1箱を積み木1個と見なし、約1,000個を組み立てて巨大迷路を作成。一面に彩色、描画を施した。子ども同士、親子で、子どもと学生等、様々な取り合わせで、くり返し探索、あるいはよじ登ってのショートカット等、歓声が響いた。

(3) おはなしひろば（絵本の読み聞かせと劇）（資料2-3～5）

学生は6班に分かれ、絵本の読み聞かせ、紙芝居、手遊び、リズムあそび、ペープサート、パネルシアターから選択、組み合わせて、各々20分間のお話し会を開いた。絵本の選択、演目決定、シナリオ作成、大道具、小道具作成、演技とすべて自分たちで行った。劇については、物語構成の確かさに対する信頼感から、今回は古典的物語を土台とした。1班は1歳対象を念頭に置き、2班以降順次対象年齢を上げることとした。

(4) おもちゃのひろば（手作りおもちゃ）（資料2-6）

段ボールで作った列車と線路、家、キャタピラー、ペットボトルを用いた音の出るおもちゃやボーリングなど、授業で製作したおもちゃを床一面に広げ、こどもたちに自由にあそんでもらった。

3. 地域連携効果についての考察

「第1回広場」当日は台風接近のため、警報が出ればその時点で中止という状況の中で、果たして入場者があるのかと危ぶまれながらの開催となった。しかし、結果的には近隣の親子65組が来場、無事すべてのプログラムを実行、存分に楽しんでもらうことができた。6回のお話し会すべてを網羅した親子も数組あり、荒天の中、予定時間を超えてなお、風作りに集中する親子もあり、満足できる結果であった。

以下、アンケート調査への来場者（保護者）の回答から取り上げ、考察してみたい。

(1) 今回準備したもの以外の催しの提案

(1) 内容

リズム（楽器）あそび、大型ブロックやマットを使った運動あそび、幼稚園児の力でできる工作ひろばなどの提案があった。

(2) 考察

屋外で遊ばせることができない当日の荒天の影響もあろうが、子どもが手足を駆使して、主体的に取り組むことのできるプログラムへの希望が多かった。

近隣に住む同年齢や異年齢の子どもたち同士が親子で触れあいながら休日を過ごすことのできる場が必要とされていると、見なしうるであろう。

(2) 自由回答欄

(1) 内容

会場の案内がとても親切でよかった。「子どもが大好き」という感じで学生の笑顔が素敵だった。お話し会だけでも良いから、毎月実施して欲しい。等々、好意的な回答が多く寄せられた。

(2) 考察

子ども福祉学科の存在が地域から期待され、そこに学ぶ学生たちがその期待に応える一つの形として、今回の活動が支持されたと言えよう。

4. 教育的効果についての考察

(1) 学生報告書に見る学生自身の自己評価

活動主体となった3科目ではそれぞれ目的に応じた活動報告書の提出を求めた。その記述の中からも、学生たちは「第1回広場」の当日、来場者との触れ合いの中で多くのことを感じ、難渋した準備段階や悪天候の下での後片付けの作業から自らの課題を見出し、学んでいることが分かる。このことは実に大きな収穫である。

以下、それらの報告書の自由回答部分から学生たちへの教育的効果がうかがえる記述を取り上げたい。

1 班活動等に関わる反省点の記述

- ・ 全体的に取り掛かるのが遅く、直前になってやっと全員が動き出した。もっと具体的に作業分担をし、計画性をもって準備すれば良かった。
- ・ 作業内容の読みが甘く、かなりの部分を2、3年生に手伝ってもらい、迷惑をかけた。(1年生)
- ・ 人任せにせず自ら動き、自分で仕事を探す。人から言われて動くのではなく、周りをよく見て、自分で考えて行動するべきだった。
- ・ 製作に必要な物品の数量の把握が難しかった。

2 次回開催時への提案

- ・ 子どもでも部屋を探せるように、各部屋の催しが分かる楽しいイラスト入り地図を配布する必要がある。
- ・ 会場の入り口を装飾すると、子どもたちが喜び、入りやすくなると思う。
- ・ 迷路は好評だったので次回も。宝探しの要素を取り入れると良いのでは。
- ・ 凧作りの間、一緒に来て待っている乳児も楽しめるようなものを用意すれば良いのでは。
- ・ 迷路やおもちゃ等の製作物の安全面での配慮を。
- ・ 迷路に使った段ボールの解体は屋外です。

(荒天のためノトスタジオ内で解体したことへの反省 筆者注)

3 保育に関連した気づきの記述

- ・保育士になりたいという自分の夢を再確認することが出来た。
 - ・環境づくりや本番までの過程で、保育士には子どもと直接関わる以外の大変な仕事がある。
 - ・子どもの目線に立つ。嬉しいときは自分も一緒に喜び、共感できることが大切だ。
 - ・年齢に応じた絵本や手遊び、子どもが分かりやすい声の大きさやスピード、シナリオの簡潔さも重要であることが分かった。
 - ・聞く態度、興味の持ち方など、子どもたちの様々な特徴を知ることが出来た。
 - ・年齢によっては迷路を楽しいと思ったり怖いと思ったりする。対応の仕方の違いを学んだ。
 - ・子どもが近寄ってくれるのを待つのではなく、自分から積極的に子どもに関わるようにしなければいけない。
 - ・子どもだけではなく、親の心を掴むのも大切だ。
- 4 後輩に伝えたいこと
- ・自分が楽しいたら他の人がしんどい思いをする。詳細な計画を立て、協力の下、早めの行動を。
 - ・準備等は大変だが、その大変さを味わったからこそ、子どもたちや保護者の喜んだ顔を見て、よい経験になったと思える。

(2) 教員の視点から見た教育的効果に関する考察

- ・学生は、年齢に応じた絵本の読み方、聞き手との視線の交わり方、声の大きさや高さ等を実際に演じる中で学習した。本番近くになるにつれ、声を出すことへの意欲が急速に高まり、照れや恥ずかしさを克服していった。
- ・劇作品を通して、準備段階の緻密さが、本番の成果に直結することも学習した。小道具、大道具の不備が演技を妨げることを学習、最後まで手直しする粘りを見せた。
- ・おもちゃの製作を通して、子どもの発達段階への理解の重要性を意識し、今後の学習への動機付けとなった。
- ・同様に、同じおもちゃに接したとき、年齢により遊び方が異なることを実

感じ、今後の学習への動機付けとなった。

- ・おもちゃの製作を通して、子どもの安全への意識が高まった。
- ・自分たちが面白いと思うことと、子どもたちが面白いと感じることの間にある差を意識したことにより、保育実践において、子どもの目線に立つことの重要性を実感した。
- ・準備に積極的に参加した学生は、計画性を持って、自主的に活動するという経験を積んだと考えられる。
- ・準備段階で、一年生の意識、行動と上級生のそれと間に大きな開きがあり、直前から本番、後かたづけを通し、上級生が自然な形で下級生を指導、援助する動きが見られた。同時に一年生には上級生に学ぼうという姿勢が生まれた。
- ・また、Ⅲで行った来場者アンケートの結果を学生に知らせたことで、おおむね好評の結果に対し、地域に受け入れられたとの実感を抱くことが出来たようである。地域に受け入れられ、愛される存在として自らを意識した時、学生の心の中での自己有用感の高まりが期待できる。またそれは子ども福祉に関わる者としての自覚にもつながる。

5. 課題と展望

(1) 課題

4月当初、学生たちは全体のイメージを描くことができず、そのため当日までの時間配分についての計画が出来ないまま、準備を開始した。本番までの準備達成一覧表、分担表等が実感を持って捉えられ始めたのは、実施2週間前であった。しかし、半期授業の一環としての位置づけから、これ以上の準備期間を取ることは実質不可能である。その条件の中で、今後学年度を越えて、いかにプログラムに連関性をもたせつつ、準備の継続性、経験の蓄積を生かしていけるかが最大の課題と言えよう。そのためには上学年の学生に制作、指導の役割を担わせることが最も有効ではないかと考える。

具体的には以下の点が反省課題として上げられよう。

- (1) 前年度より方針を立て始め、年度初めには年間スケジュールが立ってい

る必要があると考えられる。履修指導用シラバスに年間計画を記載できることが理想であろう。

(2) プログラム立案、準備計画表作成、役割分担、物品購入、近隣保育所・幼稚園との連絡、ポスター製作等広報活動等、制作に学生自らが当たることが必要と考えられる。この点については、来年度開講のプラクティカムIIIを宛てることが妥当と考える。

(3) 上級生から下級生が学び、次の世代に継承していくためには、合同プログラムを取り入れる必要があると思われる。学生の活動報告書にも、学生自らこの点については指摘している。

(4) 近隣保育所・幼稚園との連絡を密にし、ニーズを吸い上げるためには、事前のアンケート調査が必要であるとする。

一方通行的開催は避けなければならない。

(2) 展望

今後の展望としては、継続性をもって地域における子育て・子育て支援拠点としての定着を図ることが最も求められるであろう。まず、回を重ねることで、知名度という意味での地域浸透も得られるであろうし、また、フィードバックを丹念に拾い上げることで、地域のニーズに沿えるプログラムとして発展できるものと確信している。具体的展望としては以下のことが上げられる。

(1) 音楽、運動、造形等の表現プログラムの取り入れを図るために、年2回の開催が望ましい。それに伴い、母体となるクラスの学期配分を図る必要があるであろう。お話し会のみ、学生当番による月1回開催の可能性も探していきたい。

(2) 前節(4)で述べたように、事前調査を適確に行うことで、タイムリーなプログラムを提供できる体制を整えたい。

(3) さらに発展して、将来的には計画立案の段階から近隣の保育所・幼稚園および保護者に参加して貰い、地域の人々が「広場」の単なる利用者にとどまることを越えて、「広場」を能動的に作り上げる協同者として参加するプログラムへと成長させたいと願っている。

資料 1

| プログラム | | | | |
|------------------|----------------|----------------------|--------------------------------|-------------------------------|
| 遊び広場 8 2 6 教室 | 探検広場 ノトスタジオ | おもちゃの広場 ミーティングルーム | お話し広場1 プレイルーム | お話し広場11 保育実習室 |
| 9:30～11:00 | 9:30～12:00 | 9:30～12:00 | 9:30～9:50 お話し会1 赤ずきんちゃん 他 | |
| 和風製作 | 巨大迷路 | 休憩室および自由遊び | | 9:50～10:10 お話し会2 桃太郎 他 |
| | | | 10:10～10:30 お話し会3 ねずみの嫁入り 他 | |
| | | | 10:30～10:50 お話し会4 三枚のお札 他 | |
| 11:20～12:00 | | | 11:20～11:40 お話し会5 北風と太陽 他 | |
| 凧揚げ (雨天中止) | | | | 11:40～12:00 お話し会6 7匹の子ぶた 他 |

資料 2

2-1



凧作りに
興じる親子

2-3



絵本の
読み聞かせ

2-5



パネルシアター

2-2



迷路

2-4



手遊び

2-6



隠れ家

参考文献

- 朝野典子 (2007) 『『表現活動の総合研究』(劇づくり)を中心とする教育プログラム保育専門職としての表現力を育てる取組み』『全国保育士養成協議会第46回研究大会 研究発表論文集』92-93頁
- いまいみき (2006) 「てづくりおもちゃのほん1」毎日新聞社
- いまいみき (2004) 「てづくりおもちゃのほん2」毎日新聞社
- 大岩みちの (2007) 「舞台発表を通しての『気づき』(その2) 保育内容を意識することをめざして」
『全国保育士養成協議会第46回研究大会 研究発表論文集』90-91頁
- カーリン・ノイシュッツ著 (1999) 寺田隆生訳「おもちゃが育てる空想の翼—シュタイナーの幼児教育」学陽書房
- クリエイティブプレイ研究会編 (2000) 「遊びの指導 乳幼児編」同文書院
- 志田紀子 (2003) 「遊びとおもちゃ」学陽書房
- 相馬和子、岡本富郎他 (2005) 「新訂 お話とその魅力 作品と話し方のポイント」萌文書林
- 竹井 史 (2006) 「製作あそび百科」ひかりのくに
- 樋口正春 (1991) 「子育てにおもちゃを」エイデル研究所
- 広井 力 (2003) 「凧をつくる」大月書店
- 古橋和夫 (2002) 「子どもへの絵本の読みかたり 読み聞かせから読みかたりへ」萌文書林
- 松井 直 (2006) 「絵本とは何か」日本エディタースクール出版部
- 松岡享子 (2006) 「お話しをこどもに」日本エディタースクール出版部
- 松本 敦 (2007) 「表現活動の指導とその波及効果 (1) 学外公演活動」『全国保育士養成協議会第46回研究大会 研究発表論文集』94-95頁
- 松本 敦 (2007) 「表現活動の指導とその波及効果 (2) 全学生へのモデル効果」『全国保育士養成協議会第46回研究大会 研究発表論文集』96-97頁
- 代田知子 (2004) 「読み聞かせわくわくハンドブック」一声社